
不思議な話

滾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議な話

【Nコード】

N6951A

【作者名】

滾

【あらすじ】

ある少年が不思議な場所へと。そこで出会った少女との短い時間。名残惜しむ少女をなだめ、その場所を立ち去る少年。しかし実はその場所は……。

俺には靈感とか、不思議な力とかは全く無い。

今まで幽霊とか見たことなかったし、予知夢とかに至っては信じてすらいなかった。

そんな俺でも、一度だけ、たった一度だけ、不思議な体験をしたことがある。

それは本当に不思議で、結構良い話。

この話を思い出すたびに、胸を少し締め付けられるような、そんな、不思議な思い出

春上旬。

と、言っても、朝となれば少し肌寒い風が吹きすさび、それでも太陽の陽はポカポカと温かみを増している、そんな頃。

田舎、という漠然とした形容がそのまま似合う光景。

その中を、俺は自転車に乗って走っていた。

見渡して目に入るのは、田んぼ、畑、柿の木云々。畑の中心で、全く意味を成さない案山子が鳥の足場となつて虚空を見つめている。

眩しい日差しを手で遮りつつ、改めて自分が住んでいる所の田舎具合を確認した。

田んぼと田んぼの間を自転車で走りながら、周り一帯を見回す。すると、自分以外に人が殆ど居ないのが解り、なにやら、孤独感やら、優越感やらが沸いてきた。

「ふう・・・」

遮った手をハンドルに戻し、顔に受ける風に俺は目を細めた。

別に、目的地を持って走っているわけではない。向かう先になにがあるわけでもない。ただ強いて言えば、壮大に立ちふさがる山が見えるだけ。

行く先やら目的やらを決めることなく、晴れた休日に自転車にまたがって気の赴くままに走る。それが俺の趣味であり、ストレスの発散法だった。

毎週毎週、今までとは違う道を走る。見た事もない方へ、迷わない程度に突き進む。

前に一度、三時間近く走った末、自分がどこにいるんだか分からなくなることがあった。そんな状況でも、俺は“それ”を楽しんだ。迷うことによる、新たな道への進出。それが楽しくって、何時間も迷いながら走り続けた。

結局、めぐりめぐって自分の家のほうへ走っていつてしまっていたのだが、あの日が多分今までで一番楽しかった。

あの時の楽しさを求めて、やっぱり今日も迷子スレスレの道の選択。先週左に曲がったところを、右に曲がってみた。

「ん？」

ふと、目に飛び込んできたのは、小さな竹林。

その中にある、人が通るために細い道。

俺はそれを見つけた瞬間、迷わずその中へと飛び込んでいった。

高く伸びた竹が太陽の陽を遮って、さっきよりも風が心地よい。

しかし思ったほど道は長くなく、すぐに竹林を抜け出ることになってしまった。

「なんだよ・・・」

少し残念に思いながらも、名残惜しく広大に広がる竹林を振り返った。

心残りを感じつつ、まあよし、と、開けた視界に照準を戻すと、

「うお・・・」

思わず声が漏れた。

今までに見たことの無いような、“昔”を形容するに相応しい町並みが目に飛び込んできたのだ。

どうだろう……。ト。口が出てきそうなところ。と、言ったら分かり易いだろうか。

そんなト。口感溢れる町並みを、俺は意気揚々と走っていった。

良い！スゲーイイ！

今までに無い田舎具合に、俺は胸を躍らせた。

俺はこういう町並みを見ると心躍らせるのだが、視界に入ってくる全てのものが今までに一番良かった。

まず町並みが良い。この木造の家とか良い。あそこで鬼ごっこしてる子ども達も最高。

ああ、将来こんなところでゆつくり暮らしてみたいな……。

そんな事まで頭に巡らせていると、俺の視界に誰もいない公園が目に入った。

公園、と言っても、全然広くない。

在る物といえば、ベンチ、錆びたブランコ、キークー五月蠅そうなシーソー、滑ったら尻が痛そうな滑り台、錆びていて絶対に握りたくない鉄棒、だけ。

最近のアスレチックとか、そんなものは全く無く、ドッジボールが辛うじて出来るかどうか位の面積しかない。

もちろん、迷わず中に入っていく。

自転車を端に停めて、思いっきり伸びをする。心なしか空気がいしく感じられた。

自転車のカゴに手を伸ばして、中に入れておいたカバンを取る。

その中から本を取り出して、それをもって備え付けのベンチに座った。

ギャシャアア……。という、今にも壊れるんじゃないかと思われる音を出しながら、それでも気にせず読書を開始。

誰にも邪魔されず、自分で選んだ最高の場所で静かに本を読む。
これ以上の至福は、俺にとって無い。

遠くから聞こえるすずめの囀り。子ども達に笑い声。

そして読書。

俺はこのサンセットに心底満足しながら、すぐさま手元の本に意識を吸い込まれていった。

どれ位経つたろう？

陽は俺の真上まで昇ってきていて、もう昼飯時って位の時間時だと思われる。

二時間近くも本に耽っていたらしい。最初から読み始めた本を、もう読み終えてしまった。

こんなに集中できたの、久しぶりだな。

思いながら、本から顔を上げて・・・、

「うおをお！？」

思わず仰け反った。

あれだ。

俺が読んでいたのはラブコメ小説なのだが、主人公とヒロインの出会いが、ヒロインが主人公の顔を覗き込んで、ってな感じだった。だから俺は、小説のヒロインが本から出てきたのか！？と本気で思った。

うん、つまりだ。

覗き込んでたわけだ。顔。

女の子が。

ああ、断つとく。そんな都合よく、“同い年くらいの女の子”じゃない。
あない。

すっごい年下の、まだ小学校にはいったばかりか、くらいの子だ。

「・・・・・・・・・・？」

何だろう？しゃがみこんで、俺の顔を見上げている。

「・・・・・・・・・・」

それなのに、何もしゃべらない。

「・・・・・・・・・・」

何も言葉を発しないまま、俺を見ていた。

楽しい要因は何も無いだろう。

そんな沈黙に耐えかねて、

「な、何・・・・？」

俺は特上スマイルで尋ねてみた。

少女はにっこりと微笑を返して、

「・・・・・・・・・・」

それだけで会話は終了。

「・・・・・・・・・・」

ま、いつか。

本も読み終えたし、そろそろ昼飯食べたいし、この子に構う必要も無い。少し大回りでもして、家に帰ろう。

そんな事を考えながら、少女をよけつつ自転車に向かおうとして、

クイ・・・・ッ

「んあ・・・・？」

服の裾を軽く引っ張られた。

引っ張ったのは、もちろんさっきの女の子。

「・・・・・・・・何・・・・かな？」

振り返って、にこやかに尋ねる。

が、

「・・・・・・・・・・」

やはり何も返答はなく、女の子は俺の笑みをはるかに凌駕する微笑を浮かべているだけだ。

「・・・・・・・・??」

少女が言わんとする意図が分からず、俺はもう一度ベンチに腰を降ろした。

すると、

「へへへ・・・」

初めて少女が声を出して笑い、飛び乗るように俺の隣に腰を下ろした。

ギャシャア、と凄い音がして少しベンチが沈んだが、何とか大丈夫。俺は上着のポケットに本を突っ込みつつ、少女を見つめる。

少女も少女で、俺の方を微笑みながら見つめていた。

ふと、声を開いたのは少女のほう。

「お兄ちゃん、何しに来たの?」
と。

「ん?」

一瞬間の意味が分からずに、俺は首をかしげた。

少女はそれでも戸惑ったりすることなく、質問を変えた。

「どこから来たの?」
と。

「ああ、ずっと、向こうの方からきたんだよ。分からないかな、多分」

初めて会う子なのに、俺はその子に対して普通に話をしていた。

基本、俺は初対面の人とは全然話が出来ない人種なのだが、ちっちゃいからだろうか、普通よりも饒舌になつてる気さえする。

それから俺は、この女の子としばらく会話をした。

どこから来た。何しに来た。何を讀んでた。何歳だ。

そんな他愛のない話をしている間に陽も強くなり、俺は上着を脱いで、ベンチに掛けた。が、すぐに暑さを忘れて、会話を続けた。

本を読むよりも時間がかかっただろうか。気が付くと陽はすでに傾

いて、すぐそこに見える山に太陽が半分隠れてしまっていた。
そろそろ帰らなければいけない時間だ。

少女はそれでも、楽しそうに足をパタパタさせて笑顔で話をして
いた。

そんな少女に会話の終了をつげるのは心苦しかったが、時間も時間
だ。

俺は会話が途切れた瞬間を狙って、少し残念に思いながらも、

「ゴメン」といった。

「遅いから、もう帰らないと」と。

瞬間、

「え・・・？」

少女の顔が曇った。

笑みも消えた。

「あ・・・、ゴメンね・・・？また来るからさ。ほら、明日は日曜
だから、また明日も来るよ。だから、今日はもう・・・」

少女の頭を撫でて、ゴメン、と二回言った。

何故か、とてつもなく心苦しい。

いや、別にロリコンってわけじゃあないんだが。

「じゃあね」

ベンチから立って少女に言ったが、少女はうつむいて答えてくれな
かった。

嫌われただろうか。いや、別に嫌われたからなんだ、といわれれば、
別になんでもないんだけど。

が、俺は次いで、

「名前・・・、名前は？俺、学って言うんだ」
と言った。

最後に、少女に何か言って欲しかった。

機嫌を損ねたまま、つてのは、何か心に突っかかる。

すると間をおいて、少女は答えてくれた。

「・・・るな」

と。

るな。るなちゃん。

「ん、覚えた」

俺は言うど、もう一回「じゃあね」を言つて、自転車に手を掛けた。
と、首のところを引つ張られる感触を感じた。

あ、そうか、上着。

思い出して、ベンチをもう一度振り返つて――
目を疑つた。

「あれ・・・？」

いなかったんだ。

少女が。

るなちゃんが。

三百六十度周りを見回しても、どこにも。

おかしいな・・・、とか簡単な考えじゃなくて、いろんな感情が胸
の中で騒ぎまくつた。

なんか、よく分からない。

俺はベンチにかけてあつた上着を羽織つて、自転車にまたがった。

公園を出る際に、

「また、来るから」

そう、虚空に呼びかけて。

どうだった？不思議だろ？本当に、不思議な話なんだ。

だけどこの話には、まだ続きがある。

家に帰って気付いたんだけど、俺の上着には本が入ってなかったんだ。

だからそれを探しに行くことも兼ねて、俺は次の日もその場所へ向かった。俺は一回行った場所は大概覚えてる。例えその場所に行くのに何時間かかってても、行くまでに色んな場所を見てるから、それを辿って、今までも一回行った場所に行けなかった事は無かった。それなのに、あの場所にだけは、何度記憶を巡っても、たどり着くことが出来なかった。

ちゃんと記憶どおりに道を辿った。だけど、あの竹林を見つけることが出来なかった。

その竹林を見た辺りに住んでる人に話を聞いたが、竹林なんてないと言われた。

まあ、今になって考えたてみたら当然の事なのだ。

竹は、春には出てこない。

だから、“竹林”というものが存在することはおかしいのだ。

もって考えてみよう。

俺はあの時、竹林に入っすぐに抜けた。

その時、全パノラマがああの風景になつてた。

どういうことか、分かるかな？

俺が入ったのは、“小さな”竹林だった。

だからその竹林に入る手前、つまり道を曲がった時点で、竹林と、その脇から向こう側が見えていたんだ。その段階では、あんなレトロな町並みは見当たらなかった。

それに、竹林を抜けて振り返ったとき、竹林は入る前より明らかに肥大してそこにあった。向こう側が見えないくらいに。

それはさつき、『広大に広がる竹林を振り返った』と形容した事からも解る。

夢。

夢じゃなかったか？

そう言われれば、確かに俺自身否定は出来ない。そうかもしれない。けど現に、俺は本を失くした。

だから、俺は思う。

今でも、あの場所につながる竹林はどこかにあって、今もどこかで、あの夢のような場所に通じてるんじゃないか、って。

あの“るな”ちゃんが、俺の本を持っててくれるんじゃないか、ってさ。

な？不思議だろう？

さて、不思議な話。

良い話でまとめてみたけど、これ、実は裏の話があるんだ。

長々と話しておいて、まだあるのか。そう思うかもしれない。だけど、もうちょっと付き合って欲しい。

あの場所を探してるうちに、俺はある話を聞いた。

神隠し、ってのが、俺が竹林を見た辺りではあるらしい、と。

今でも年に一人くらいの割合で、行方不明者が出る、と。

そして神隠しに逢いかけた人は、必ず竹林を通ると証言している。

竹林を通った向こう側には自分の望んだ場所があって、そこに一人の少女が現れる。

その少女のみに話を通じ、異様に仲良くなれるそうだと。

そうなることで、その場所に迷い込んだ人間を外に出さないようにするのだ、と。

この話を聞いたとき、俺は“るなちゃん”を思い出した。

あの子がそうなのだろうか？

少し不安に思えてきたその時、

ふと、俺は思った。

俺が竹林に来たとき、向こう側が見えるほどの面積しかなかった。

が、抜けた後に振り返ると、竹林の面積は数倍以上に大きくなってた。あれは、もしかしたら俺を帰さないようにする、という表れだったのかもしれない。

それからもう一つ。

これを思い出したとき、俺の体を稲妻が走ったかのような衝撃が襲った。

るなちゃんが、自分の名前を言ったとき、

「・・・るな」

と、彼女は言った。

よく、思い出してみた。

「・・・るな」の“・・・”の部分。

彼女は、なにか言ってた気がする。

小さな声で。

「・・・るな」

「・・・えるな」

「・・・かえるな」

「帰るな」

俺は体を振るわせた。

彼女は名前を名乗ったわけじゃなかった。

「帰るな」と、「帰るんじゃない」と、言っていたんだ。

そういえば、その後服を引つ張られた。

引つ張られた場所は、首のところ。

少女の背の高さじゃ、そんなところに届きはしない。

じゃあ、

あの時、俺の服を引つ張ったのは、誰なのだろう・・・？

本がなくなったのは、俺が取りに戻ってくるために、あの少女がポケットから抜き取ったのかもしれない。

俺は、あれから竹林を見ても入らないことにしている。

だけど、まだ休日は自転車で走ってる。

今も、走ってる。

この話を聞いたあなた。

アナタには思い当たる節は無いか？

近くに、周りとマッチしない竹林は無いか？

もしあったとしても、そこをくぐってはいけない。

もしくはぐっしてしまって、そこが自分の望む場所だったとしても、気を許してはいけない。

ただ、もしそこに行つて帰つてこれる自信があるのなら、

あの子に、

「るな」ちゃんに一言、「楽しかった」とは、伝えておいてくれ。

（後書き）

初の投稿なので、至らぬ所が多々あると思いますが、楽しめてもらえたなら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6951a/>

不思議な話

2010年11月23日03時55分発行